

論文

漢訳『雑阿含経』散逸「如意足相應」の
サンスクリット資料⁽¹⁾

細 田 典 明

〔抄 録〕

漢訳『雑阿含経』は乱丁により本来の第22・25巻は失われている。そのうち、本来の第25巻には、念処相應末尾、正断・如意足の2相應、根相應冒頭に属する諸経が不明である。漢訳『雑阿含経』の各巻には平均して25経程が収められるが、「道品」には短経が多く含まれるため、さらに10経程度の増加が見込まれる。

はじめに、漢訳『雑阿含経』では「神足」と「如意足」は訳し分けられており、用例の解析から「如意足相應」が相應名として相應しいことを提示する。次に、『瑜伽師地論』『摂事分』から散逸経の順序と内容を関係経論とともに示し、従来比定し得なかった『ウパーイカー』の阿含経引用をはじめとする散逸部分を補うサンスクリット文資料 (TT VIII A・THT 537・SHT 162) を比定する。最後に、前後の相應も含めて、散逸部分の経順と内容を明らかにする表を巻末に掲載する。

キーワード 雑阿含、瑜伽論摂事分、SHT 162、TT VIII A、THT 537

§ 1. 『雑阿含』⁽²⁾における「神足」と「如意足」

漢訳『雑阿含経』における *ṛddhi* の訳語は「神足」、*ṛddhipāda* の訳語は「如意足」と訳し分けられているため、相應名は「如意足相應」とする。なお、下記に見る「神足」は、時に「神通」「神變」とも訳されるもので、漢訳『雑阿含経』において訳語が定まっていない。一方、「如意足」の用例は、ほぼ三十七菩提分法の一つとして列記される。

相應	卷(現行)	用例数	訳語	経番号 ⁽³⁾	用例	対応パーリ
五取蘊	2 (10)	6	如意足	263	三十七菩提分法	SN. 22. 101. <i>Vāsijaṭaṃ</i> .
五取蘊	3	1	四如意足	75	三十七菩提分法	SN. 22. 58. <i>Arhaṃ</i> .
五取蘊	4 (2)	1	四如意足	57	三十七菩提分法	SN. 22. 81. <i>Pāṇileyya</i> .
五取蘊	6	1	如意足者	130a	略経リスト	ø
五取蘊	7	1	如意	174a	略経リスト	ø ⁽⁴⁾
五取蘊	7	2	如意足	179	欲定断行成就如意足	ø

六処	8	3	神足	197	神足示現	SN. 35. 28. Āditta.
六処	10 (43)	1	如意足	1177	四如意足	ø
六処	12 (13)	1	如意足	305	四如意足	MN. 149. Saḷāyatana.
因縁	17	1	如意	484	化如意 ⁽⁵⁾	AN. 5. 170. Bhaddaji.
弟子所説	18	3	如意	494	自在如意 ⁽⁶⁾	AN. 6. 41. Dārukkhandha.
弟子所説	21	4	如意足	561	四如意足	SN. 51. 15. Brāhmaṇa.
弟子所説	21	1	神足	571	神足現化	SN. 41. 4. Mahaka.
道品	23 (31)	1	如意足	879a	四如意足	AN. 4. 14. Saṃvara.
道品	24	1	如意足	638	四如意足	SN. 47. 13. Cunda.
道品	26	1	如意足	663a	四如意足	ø
道品	26	1	如意足	684	四如意足	cf. MN. 12. Mahāsihanāda.
道品	26	1	如意足	694	四如意足	AN. VIII. 28. Bala.
道品	30	1	如意足	832a	四如意足	AN. III. 88. Sikkha.
道品	31 (41)	4	神足	1121	神足月	AN.X. 46. Sakka.
有偈品	38	1	神足	1074	神足力	Vinaya, Mahāvattthu. 1. 22.
有偈品	39	2	如意足	1098	四如意足	SN. 4. 2. 10. Rajja.
有偈品	45	1	神足	1216	三明の神足	SN. 8. 3. Pesalātimaññanā.
有偈品	49	1	神足	1307	疾神足	SN. 2. 3. 6. Rohita.
有偈品	50	1	神足	1325	神足瑞應月	SN. 10. 5. Sānu.
Aśokāvadana	ø (23)	5	神足	604	神足力	cf. Divyāvadāna 26-27

以下、本稿では、訳語「如意足」が原語 ṛddhipāda を意味するものとして統一し、「神足」は時に「神通」「神變」するものとして区別するが、他文献の用例では「神足」は「如意足」を意味する場合が多いものと理解する。

§2. 失われた「如意足相應」を復元する手がかり

『瑜伽論』「摂事分」は、本来の『雑阿含』の経の順番に沿って解説しているので、失われた「如意足相應」の経順とその内容を概観することが出来る⁽⁷⁾。そこで、先ず「摂事分 (VS)」から知られる如意足相應の内容 (VS 5.2～6) を①～⑤の順に示し、次に『ウパーイカー (AK-up)』所引経と関連文献を挙げ、その結果得られた散逸「如意足相應」の内容を通じて、「如意足相應」の原語と未比定サンスクリット断片の「如意足相應」との比定を、本章では特に『*目鍵連経』について検討する。

§2-1. 『瑜伽論』「摂事分」と「声聞地」

『瑜伽論』「摂事分」は、時に『瑜伽論』の他の箇所への参照を促すが、「道品」については「声聞地」の参照が多い。『雑阿含』「如意足相應」の5科 (VS 4.5.2-6) について見るならば、「如聲聞地」は以下の通り①・②(1)(2)・④の実質3箇所、さらに「声聞地」の中で別箇所を参照する②(3)が知られる。これらは「第二瑜伽処⁽⁸⁾ (ŚrBh II-(A)-II-12 瑜伽修)」に含まれ、①と④はその内「II-12-b-(3)四神足」に当たる。②は「II-12 瑜伽修 -a 想修-(2) 後の二句の別釈」に当たり、「II-12-b 菩提分修-(3)四神足」に連結する。このことから、「声聞地 第二

瑜伽処 菩提分修 四神足」は漢訳とチベット語訳「摂事分 (4) 菩提分法 如意足 (VS 4.5. 2～6)」と密接に関係し、その内容をサンスクリット原典で提供する資料である。「摂事分」では、さらに③のように、「五解脱処」について解説するが、「如意足相應」にも「五解脱処」を説く経があることが、『ウパーイカー』の引用 (Hj [1030]) から知られる。以下、「摂事分」と「声聞地」の参照箇所を挙げる。

①⁽⁹⁾ VS 5.2 力 (stobs)

復次。應知建立。四種神足。如聲聞地。已廣分別。(T30, 862a13-14)

rdzu 'phrul gyi rkang pa bzhi rnam par bzhag pa ni rgyas par 'di lta ste. nyan thos kyi sa las 'byung ba bzhin du rig par bya'o. (367a1)

→ ŚrBh II 212-214 [II-12-b-(3) 四神足 -i 四三摩地]

② VS 5.3 修 (bsgom)

(1) 毘鉢舍那品所緣境者。謂前後想。此想分別。如聲聞地。應知其相。(T30, 862b15-16)

de la lhag mthong gi phyogs dang mthun pa la dmigs pa ni phyi ma dang snga mar 'du shes te. de yang snga ma bzhin du 'di lta ste nyan thos kyi sa las 'byung ba bzhin du rig par bya'o. (367b6-7)

→ ŚrBh II 172-173 [II-12 瑜伽修 -a 修 -(2) 後の二句の別釈]

(2) 奢摩他品所 境者。謂上下想。此亦如前。應知其相。(T30, 862b17)

zhi gnas kyi phyogs dang mthun pa ni steng dang 'og tu 'du shes te, snga ma bzhin du rig par bya'o. (367b7)

→ ŚrBh II 172-173 [々] santy asmin kāye kēsā romāṇīti pūrvavat.

(3) 謂此身中所有種種髮毛爪齒。如前廣說。(T30, 439c 1-2)

cf. ŚrBh II 58-61 [II-3-b-(1) 不淨所緣 -i 六種不淨 -(a) 朽穢不淨 -① 依内不淨]

③ VS 5.4 等持 (ting 'dzin)

復次於五解脱處。如其所應當知欲等増上四種三摩地。(T30, 862b25-26)

rnam par grol ba'i skye mched lnga la ni ci rigs par 'dun pa la sogs pa'i dbang gis byung ba'i ting nge 'dzin rnam pa bzhi yod par rig par bya ste. (368a-2)

cf. ŚrBh II 212~217 [II-12-b-(3) 四神足 -i 四三摩地]

声聞地参照の言及はないが、上記「① VS 5.2 力」参照。

なお、ここでは「五解脱処」が解説される。

④ VS 5.5 異門 (rnam grangs)

所餘分別義。及分別斷行。如聲聞地。應知其相。(T30, 862c22)

lhag ma spong ba'i 'du byed rnams kyi rnam par dbye ba ni 'di lta ste nyan thos kyi sa las 'byung ba bzhin no. (368b3-4)

→ ŚrBh II 218-220 [II-12-b-(3)-ii -(a)八種斷行]

⑤ VS 5.6 (1) 神足 (rdzu 'phrul)

復次。修諸神足。以為依止。能正引發。諸聖神通。(T30, 862c2)

'phags pa rnams ni rdzu 'phrul gyi rkang pa sgom pa la brten nas 'phags pa'i rdzu 'phrul mngon par bsgrub bo. (368b-4)

cf. ŚrBh II 222-223 [II-12-b-(3)-iii 神足]

これを「声聞地」の順にまとめると、以下の通り「II-12-b 菩提分修 -(3) 四神足」の内容がほぼ「摂事分」に対応する。

② VS 5.3: ŚrBh II 172-173 [II-12 瑜伽修 -a 想修 -(2) 後の二句の別釈]
→ 「II-12-b 菩提分修 -(3) 四神足」に連結する。

① VS 5.2: ŚrBh II 212-219 [II-12-b-(3) 四神足 -i 四三摩地]

③ VS 5.4: ø, 上記① VS 5.2 参照 [々]
なお、「五解脱処」の解説について『瑜伽論記』巻24は『成實論』を参照する⁽¹⁰⁾。

④ VS 5.5: ŚrBh II 218-221 [II-12-b-(3)-ii -(a) 八種斷行 -(b) 三摩地斷行成就神足)]

⑤ VS 5.6: ŚrBh II 222-223 [II-12-b-(3)-iii 神足]

§ 2-2. 『ウパーイカー』所引経と関連文献

『ウパーイカー』の引用する『雑阿含』欠落経について「如意足相應」には、上記①・②・③・⑤に対応する4経が知られる⁽¹¹⁾。次に、④も含む5経について、関連文献を参照する。

① Hj [6075] 如意と如意足; SN 51.19 (Iddhādidesaṇā):

§ 0 序 AKBh 384.7; AK-vy 654

§ 1 ṛddhi 如意 do., AK-vy 602; SBV II 246; 『法蘊足論』(T26, 471c13-14)

§ 2 ṛddhi-pāda 如意足 AK-vy 602; 『法蘊足論』(T26, 471, c14-18); Saṅg 3.50

§ 3 ṛddhipāda-bhāvanā 修如意足 AVS § 15; 『法乘義決定経』(T17, 656c20-29); PVP 1-2; Dbh 24

§ 4 ṛddhipādabhāvanā-gāmin 修如意足道

② Hj [7002] 修如意足; SN 51.20 (Vibhaṅga): AKBh 387.11; AK-vy 619; ASBh § 92, p.87.
cf. Hj [7011] “rdzu ’phrul gyi rkang pa gnyis pa bsgom pa’i mdo (* 修如意足經, Ṛddhipādabhāvanā)”

③ Hj [1030] 五解脫處; AN V 26 (Vimuttāyatana): AK-vy 54; Saṅg 5.19; ASBh § 92, p.87;
『集異門足論』(T26, 424a4-); 『中阿含』 86 說処經 (T1, 563c22-); 『大集法門經』 卷 2
(T1, 230c7-); 『舍利弗阿毘曇論』 卷16 (T28, 636b7-); 『成実論』 卷14 (T32, 355a1-)

④ Hj ø, 八種斷行 AK-vy 601 “aṣṭau sūtre paṭhyante.”
Bhk 184 “ata evoktaṃ sūtre. [aṣṭa]prahāṇa[samskāra]-
samanvāgataḥ ṛddhipādaṃ bhāvayatīti.”

⑤ Hj [2015] 神足; SN 51.10 cf. ① Hj [6075] § 4
前半 = Hj [6075] AKBh 384, 7-8; 『婆沙論』 卷141 (a)
後半 (1) = Hj [7002] ASBh § 92 (iv) p.88
後半 (2) AKBh 44, 15; 『婆沙論』 卷141 (b);
cf. KVV⁽¹²⁾

§ 2-3. 「如意足相應」の原語

⑤ Hj [2015] 後半を引用する『婆沙論』 卷 141 は「四念住」(724a8-), 「四正斷」
(724a23-), 「四神足」(725a28-), 「五根・五力」(726b13-), 「七覺支」(726b21-), 「八道支」
(726b29-), 「四靜慮」(726c7-), 「四無量」(726c15-), 「八解脫」(727a1-), 「八勝處」
(727a11-), 「十遍處」(727a19-), 「八智」(727a29-), 「三等持」(727b2-), 「五通」
(727b22-728b28) について述べ、「四神足」には 4 箇所を経の引用が含まれる。

- (a) 如契經說。苾芻當知。欲三摩地斷行成就修於神足。(725c10-11)
- (b) 如契經說。苾芻當知。何等名壽。謂四神足。(725c29) ⁽¹³⁾
- (c) 如契經說。若有苾芻苾芻尼等。於四神足若習若修若多修習。彼若希求住壽一劫或一劫餘。
隨意自在。由此故說神足為壽。(726a4-7)
- (d) 如契經說。...略 (726a8-b12) = 『雜阿含經』 第 561 經, (T2, 147a13-b12); SN 51.15.
Brāhmaṇa.

このうち、(a) は① Hj [6075] との並行句であり、(d) は『雜阿含經』 第561經に対応し、
(b) は⑤ Hj [2015] に対応する。この「延寿命」の定型句について、パーリ「如意足相應」

(SN 51) には Cetiya (SN 51.10) のみが知られる。一方、*Karmavibhaṅgopadeśa* には、「如意足相應」の「鹿母講堂」において説かれる「延寿命」の定型句が下記の通り、引用される。

yathoktaṃ ṛddhipādanipāte mṛgāramātuḥ prāsāde.

“evaṃ bhāviteṣu bhikṣavas tathāgataś caturṣu ṛddhipādeṣu kalpaṃ vā tiṣṭhet kalpāvaśe-
ṣaṃ vā.”

如意足相應における鹿母講堂に説かれる。すなわち、「比丘たちよ、このように四如意足を修習した如来は一劫でも一劫余でも生き続けるであろう。」

このサンスクリット文には3つの重要な情報が含まれている。

- 1) 「如意足相應」を “ṛddhipāda-nipāta-” と記すこと。
- 2) 「説処」が “mṛgāramātuḥ prāsāda-” であること。
- 3) 「延寿命」を説くこと。

パーリ「如意足相應」(SN 51) では、Moggalānasutta (SN 51.14) が、1) と 2) に対応する。3) は先に挙げた Cetiya (SN 51.10) にのみ知られるが、両経は連続し、『雑阿含』では「延寿命」の内容を含むという推測は無理なことではない。

『雑阿含』の「品」と「相應」の原語について、“saṃyukta” と “nipāta” のどちらを当てるか解釈が分かれるが⁽¹⁴⁾、本稿では相應名を “nipāta” とする資料を提示する。

§2-3-1. TT VIII A Ⅱ.7-9: 偈頌・要句集 (2)

この『* 目犍連経 (Maudgalyāyana-sūtra)』⁽¹⁵⁾のサンスクリット断片と思われる箇所を、TT VIII A Ⅱ.7-9 と THT 537 の2つの断片の比定を兼ねて、次に検討する。

トルコ語併記サンスクリット語断片 TT VIII A⁽¹⁶⁾ 第1行から第5行前半は「念処相應」末尾に対応することを、細田 [2016] において指摘した。「正断相應」については、細田 [2003] において検討したが、さらに細田 [2017] において、第5行後半から第7行前半が「正断相應」に応ずることを含めて、道品の偈頌・要句を一覧し、第1行から第7行の比定を行った。この第7行後半から第9行前半が「如意足相應」の要句を含む。以下、当該箇所を挙げる。なお、転写に伴う字句修正が注記されるものは、問題のない限り修正後の読みに従い、併記される古トルコ語は必要に応じて言及し、欠落範囲の目安となる「+」の表記などは省略した。

(a) 第7行後半: /ā. adhipati(m) kṛtvā ... prahāṇasaṃskārā.

(b) 第8行前半: vibhṛāntacittā ... /llapayati. upamayatu.

(c) 第8行後半から第9行前半: saṃśithi^[L.9]lāni ca linatāni.⁽¹⁷⁾

(a) 第7行後半、“/ā.”, “adhipati(m) kṛtvā.”、第8行前半 “prahāṇasaṃskārā.” の3語について、最初の語は欠落しているものの、併記される古トルコ語 “yārim_ülüş rddhi uyu üzā.” は“rddhipāda-”、すなわち「如意足」を意味する。従って、最初の語は“rddhipādā(h)”と推定することが可能である。“adhipati(m) kṛtvā”は四如意足各支（欲・精進・心・思惟）⁽¹⁸⁾を「増上して」各支の定を得ることをあらわす定型句の一部であり、“prahāṇasaṃskārā.”は“chanda [vīrya /citta/ mīmāṃsā]-samādhi-prahāṇasaṃskāra-samanvāgatam（欲定斷行成就如意足/精進定/心定/思惟定斷行成就如意足）の「斷行」に当たる。複数形で示されるのは「四如意足」同様「四斷行」（あるいは「八斷行」）と考えられるが、いずれにしてもこれらは「如意足」に関わる要句である。

(b) 第8行から第9行前半にかけての3語中、“vibhrāntacittā.”は散逸『*目犍連經』のもと考えられ、これを裏付ける資料としてのトカラ語B併記サンスクリット語断片 THT 537を次項 (§2-3-2)で検討する。

また、“/llapayati.”と併記される古トルコ語は、“nān yaşım yaşnāmāz”、脚註では“yaşān-māz?”と修正案を提示するが、G. Clausonの辞書⁽¹⁹⁾では、

Bud. (Sanskrit lost) ne:g yaşın yaşna:ma:z ‘the lightning does not flash’ TT VIII A.8 (mistranslated):

と、読み方が訂正され、「電光は輝かず」の意味に変更される。これは“upamayatu.”「譬喩を示せ」へ続くものと解釈できるが、『サンユッタ・ニカーヤ』『如意足相應』に対応を見出すことはできない。

(c) 第8行後半から第9行前半の“saṃsithilāni ca līnatāni”「緩・懈怠」「沈・劣」⁽²⁰⁾の語も「如意足」に関係する修行者の状態を表す句である。問題は、“calitanāni.”と転写された読みを、

- 1) cālītāni (震動)と読んで「鹿母講堂震動」⁽²¹⁾に関連づけるか、
 - 2) ca līnatāni (沈・劣)と読んで、“ca”を付すことから要偈の引用⁽²²⁾と解するか、
- いずれにしても、読みを修正する必要がある。

第9行後半“tatas tanurai.”, “avandhyatvāt”は、「根相應」第652・653經の「若軟若劣」「不空」(T2, 183a27-29; b7-15)に比定される。

§2-3-2. トカラ語B断片 THT 537 a(=R) 4~5

トカラ語B併記サンスクリット語断片 THT 537⁽²³⁾は、サンスクリット語とトカラ語Bを併記する断片群(THT 527-551)のなかで、各葉5行を有する14断片(THT 527-540)の一つである。この断片には、四正断から四如意足に関する要語が一語毎に併記にされる。なお、葉

の表裏は a, b で表記されるが、a を裏面 (R)・b を裏面 (V) と読み、先ず、『目鍵連経』に該当する箇所を示し、次に両面10行全体の内容を見る。

a(= R) 4 後半 “uddhatā · śarwari ///” から、a(= R) 5 “/// (asamā)hitā · akraupatte pāl-skoci · vi(bh)rāntaci(ttā) ///” について、TT VIII A 1.8 の “vibhrāntacittā.”、そしてパーリ『目鍵連経』(SN 51.14) “asamāhitā vibbhantacittā” と一致し、“uddhatā” もこの定型句最初の語として知られる。

『目鍵連経』と比定しうるパーリ『目鍵連経』の箇所を以下に示す。

1. ... Bhagavā Sāvatthiyaṃ viharati pubbārāme Migāramātupāsāde.

2. tena kho pana samayena sambahulā bhikkhū heṭṭhā Migāramātupāsāde viharanti
uddhatā unnaḷā capalā mukharā vikiṇṇavācā muṭṭhassatino asampajānā asamāhitā
vibbhantacittā pākatindriyā.

3. ... ete kho Moggalāna sabrahmacāriyā heṭṭhā Migāramātupāsāde viharanti
uddhatā unnaḷā capalā mukharā vikiṇṇavācā muṭṭhassatino asampajānā asamāhitā
vibbhantacittā pākatindriyā. (PTS Vol.5, pp.269-270)

3. モッガーラナよ、同梵行者たちはミガーラマートゥ講堂の下に住んでおり、
掉挙・驕慢・輕薄・饒舌で雜語をなし、失念し、不正知にして、心定まらず、心が迷亂し、
根が低劣である。

この定型句は成立の古い「有偈品」(SN 2.3.5. Jantusutta, SN 2.9.13. Pākatindriya) にもあり、『雑阿含経』及び『別訳雑阿含経』は以下の通りである。

『雑阿含経』第1343経：言語嬉戲、終日散亂。心不得定。縱諸根門。馳騁六境。(370a11-14)

『別訳雑阿含経』第363経：掉動不停。少於慚恥。輕躁佞戾。識念。不定。心意惶惶、諸根馳散。(491c8-9)

さらに、この定型句はサンスクリット『増一阿含』(EĀ) にあり、パーリ『増支部』との対応は以下の通りである。

EĀ (Trip. 26.42); AN II.5 Parisavaggo. 1 (I.70);

EĀ: uttānā parṣat katamā.

AN: katamā ca, bhikkhave, uttānā parisā? idha bhikkhave,

EĀ: yeyaṃ parṣat uddhatā⁽²⁴⁾ unnatā capalā mukharā pragalbhā

AN: yassaṃ parisāyaṃ bhikkhū uddhatā honti unnaḷā capalā mukharā vikiṇṇavācā

EĀ: gharṣitasmr̥tir a(samahita) /// + + + + + + + + +⁽²⁵⁾ /

AN: muṭṭhassatī asampajānā asamāhitā vibbhantacittā pākatindriyā.

EĀ: (iyam u)cyate uttānā parṣat.

AN: ayaṃ vuccati, bhikkhave, uttānā parisā.⁽²⁶⁾

§2-3-2-1. トカラ語 B 断片 THT 537 と如意足相应

以上、「如意足相应」『* 目鍵連経』に関わる資料を検討した。次に THT 537 全体の内容について「正断相应」・「如意足相应」の要句をトカラ語 B と併記している点について述べる。

b(= V) 1 /// peś · ⁽²⁷⁾patatyai · pakaiś · prat(i)dāyai///

b(= V) 2 /// spelki · cchandaṃ janayati · ñās tanmāstā(r)///

b(= V) 3 /// śaṃ · sthitaye · stamatsiś · a///

b(= V) 4 /// {oṃ}ṣap nesalñe tsmālñe aurtsaññe(ś)///

b(= V) 5 /// · yaikoṣ krāke ///

b(= V) 1: 書写自体に問題があることが指摘され⁽²⁸⁾、比定は困難である。

b(= V) 2~3: サンスクリット 3 語 + b(= V) 4: トカラ語 B は「四正断」の「已生悪・未生悪・已生善・未生善」についての定型句の一部であることが知られ、「未生善」についての一例を挙げる。

utpannānaṃ kuśalānaṃ dharmānaṃ sthitaye asaṃmoṣāya bhāvanāparipūraye bhūyobhāvāya vṛddhivipulatājñānasākṣatkriyāyai chandaṃ janayatīti pūrvavat⁽²⁹⁾. (AK-vy 599)⁽³⁰⁾

これによって、“b(= V) 4 /// {oṃ}ṣap nesalñe tsmālñe aurtsaññe(ś) ///” は、“bhūyobhāvāya vṛddhivipulatā-” の訳語であることが判明する。したがって表面 b(= V) は「正断相应」に関する要句と見ることが出来るが、パーリ「如意足相应」にもこの定型句を含む一例が『目連経』(SN 51.14) の前の『欲経 (Chanda)』(SN 51.13) 知られる。表面 b(= V) が「正断相应」に属するものか「如意足相应」に属するものか慎重を期すが、いずれの場合も b(= V), a(= R) とする点に相違はない。

次に、裏面 a(= R) について、残る a(= R) 1~4前半の部分についてみる。

a(= R) 1 /// {sa}mādhiprahāṇasaṃ{skāra-} ///

a(= R) 2 /// · rutkatsiś utsūḍhi · wratstsoñña ///

a(= R) 3 /// ⁽³¹⁾{andhakārāyatta}tvam · ⁽³²⁾orkamotsaññe · saṃnirodhas{ahagataṃ} ///

a(= R) 4 /// ⁽³³⁾{cittam abhini}r{ṇ}āmayati · palsko namśaṃ · uddhatā · śarwari ///

a(= R) 5 /// {asamā}hitā · akraupatte pālskoci · vi(bh)rāntaci{ttā}///

a(= R) 1: “{sa}mādhīprahāṇasam{skāra-}”。欲・精進・意・思惟いずれかの「定斷行」に相当する。

a(= R) 3: “{andhakārāyatta}tvam”。本稿 § 2-2における② Hj [7002] と⑤ Hj [2015] に共通する「光明想」の部分に該当し、ASBh § 92 からサンスクリット文が回収される。

② Hj [7002] (2) ⁽³⁴⁾ 'di ltar bdag gi 'dun pa mun pa'i rang bzhin du ma gyur cig ces.

 * (6) 'di ltar bdag gi sems mun pa'i rang bzhin du ma gyur cig ces bya ste

 * (7) 'di ltar bdag gi sems mun pa'i rang bzhin du ma gyur cig ces bya bar 'gyur ro.

⑤ Hj [2015] (2) bdag gi sems la mun pa 'byung par ma gyur cig ces bya sgom par byed. cf. ASBh § 92 (iv) p.88: na ca me 'ndhakārāyattatvam bhaviṣyati cetasa iti. 「當令我心無諸闇蔽」⁽³⁵⁾ bdag gi sems 'dun pa can gyi tshul du ni mi 'gyur bar bya'o zhes bya ba'i dbang du mdzad nas.

“saṃnīrodhas{ahagatam}” は② Hj [7002] が基づく AKBh の引用する経に含まれる。

AKBh (p.397 l.11): sūtra uktaṃ, kathaṃ cittam adhyātmaṃ saṃkṣiptaṃ bhavati.

yac cittam styānamiddhasahagatam adhyātmaṃ saṃnīrodhasahagatam no tu vipaśyanayā samanvāgatam. cf. AK-vy 621.

真諦訳：如經言。云何心於內成略。若心與羸弱睡眠相應。或於內攝持相應。不與毘鉢舍那相應。⁽³⁶⁾

玄奘訳：經言。此心云何內聚。謂心若與昏眠俱行。或內相應有止無觀。⁽³⁷⁾

② Hj [7002] (16) ji ltar na 'dun pa nang du bsdus pa yin zhe na, 'dun pa gang rmugs pa dang, gnyid dang lhan cig par gyur cing nang du kun 'gog pa dang lhan cig par gyur la lhag mthong dang mtsungs par mi ldan pa yin no.

a(= R) 2: “utsūḍhi”。『雑阿含』では“utsāha”に続いて、12の実践項目の一つとして列記される。これらの項目は「略経」の中に見られるが(第130経末・第174経末・第894経末)、禪觀・瑜伽の系譜を見る上で重要である⁽³⁸⁾。しかし、THT 537 における用例は、これら12の項目を列記しているとは考えにくい。“utsūḍhi”の前にある「動く・脱する」等を意味する“rutkatsiś”は“utsāha”に対応する可能性は低いからであり、10数項目の“utsūḍhi”のみを挙げるならば、この項目に特化した経が知られるべきである。それは『アングッタラ・ニカーヤ (AN)』に見出され、a(= R) 4前半“(cittam abhini)r(ṇ)āmayati”の句も含む。『雑阿含』と『アングッタラ・ニカーヤ』が対応するケースは多く、『マッジマ・ニカーヤ (MN)』や『ディーガ・ニカーヤ (DN)』との対応が『雑阿含』の内容をその一部として収めている場合と異なる。当然、経の長短に起因するためである。

§2-3-2-2. AN V 67・68「如意足經」

AN V 67・68の経名を『赤沼・互照録』では“*Iddhipādā*”・“*Nibbidā* (1)”とするが、“*Paṭhama-iddhipādasutta*”・“*Dutiya-iddhipādasutta*”とする方が相応しい。そして、「補遺」も含めて阿含との対応はみられない。両経は「四如意足」に加えて「勇悍 *ussolhi* = *utsūḍhi*」を第5とするため、『アングッタラ・ニカーヤ』第5集に収められる。両者は略広の対をなし、前者は比丘・比丘尼に功德が期待されること、後者は正等覺以前に修習した結果「六神通」を得たことを説く。神通、すなわち如意を説く始めが、THT 537a(= R) 4前半の“(cittam abhinir(ṇ)amayati)”に対応する。

以下、THT 537の用語に関わる箇所を抜粋して挙げるが、後者は世尊の経験として説かれるので動詞は過去になり、和訳は後者に従う。

AN V (7) *Saṇṇāvaggo* (PTS III, p.82)

67: Katame pañca? Idha, bhikkhave, bhikkhu chandasamādhi-padhānasaṅkhāra-samannāgataṃ iddhipādaṃ bhāveti,

68: Katame pañca? chandasamādhi-padhānasaṅkhāra-samannāgataṃ iddhipādaṃ bhāvesiṃ, 五つとは何か。欲定正勤行成就の如意足を修した。

67・68: viriya-samādhi…citta-samādhi…vīmāṃsā-samādhi-padhāna-saṅkhāra-samannāgataṃ iddhipādaṃ bhāveti/bhāvesiṃ, *ussolhiṃ* eva pañcamhiṃ.

精進定・意定・精進定・思惟定正勤行成就の如意足を修した。勇悍こそが第五である。

68: So kho ahaṃ, bhikkhave, imesaṃ *ussolhi-pañcamānaṃ* dhammānaṃ bhāvitattā bahulikatattā yassa yassa abhiññāsacchikaraṇīyassa dhammassa *cittaṃ abhininnāmesaṃ* abhiññāsacchikiriyāya, tatra tatveva sakkebhābataṃ pāpuṇiṃ sati sati āyatane.

比丘たちよ、実に私は、これら勇悍を第五とする諸法を修習し、復習し、通智の作証（神通智など）によって通智の作証される法に心を向けて、どんな所でも念のある所を作証することができた。

「如意足相応」に(六)神通を説くことは、先に見た① Hj [6075]、⑤ Hj [2015] に知られるが、VS 5.6は「神通 (*rdzu 'phrul*)」について解説するものである。

§3. 散逸部分を補うサンスクリット文資料

散逸部分を補うサンスクリット『雜阿含』資料として、SHTとTT III A・THTの断片からサンスクリット文が回収される。本章では、2節に分けて比定し得る箇所を挙げる。

SHT の断片群の中で、SHT (IV) 30と SHT (IV) 162は『雑阿含』全体に及ぶサンスクリット断片として注意されるが、両断片群と漢訳『雑阿含経』との比定は半分程度であるため、新たに比定し得た箇所を挙げる。

§3-1. SHT (IV) 162

本稿では未比定部分中、念処相應の経(622= MPS; 623)に比定される d 2, d 4, d 5 について、細田[2006]のテキスト文節番号に従って照合する。A・B面は、d 2A(= V), B(= R); d 4A(= R), B(= V); d 5A(= R), B(= V)になる。以下サンスクリット文中にある d 群各断片の箇所を太字にし、断片番号・裏表・行番号を付した。

(622) 18 = MPS 10.16: 時菴羅女詣世尊所。稽首禮足。却住一面。

ath(ā)mrap(ā)ālir yena bhagavāṃs te(d5Va)⁽³⁹⁾nopajagāma || upetya bhagavatpādaḥ śi(rasā vanditvaikānte nyaṣīdat ||)

23 = MPS 12.1~2: 設種種食。布置床座。晨朝遣使。白佛時到。

athāmrapālis tām e(va rātriṃ sucim praṇītaṃ khādaniyabhojanīyaṃ samudāniya kālyam evotthāya āsanakāni prajña)pya uda(d2V1)⁽⁴⁰⁾kamaṇim pratiṣṭhāpya bha(gava)t(o)dūte(na) kālam ārocayati ||

sam(a)yo bhadanta sadyo bhakta(m) yasy(e)dān(iṃ bhavān gautamaḥ kalam ma-)(d5Vb) nyate |

24 = MPS 12.3: atha bhaga(vān pūrvāhṇe nivasya pā)tracivaram ādaya bhikṣusaṃghapari-vṛto bhikṣusaṃghapuraskṛto yenāmrapālyā(gaṇikāyā bhaktābhisāras) (d5Vc)⁽⁴¹⁾teno(paja)-gama(|| upetya purastād bhikṣusaṃghasya prajñapta evāsane)nyaṣīdat ||

27 = MPS 12.6: 爾時世尊爲菴羅女。說隨喜偈。

atha bhagavān āmrāpālyas tad dānam anayābhyānumodanayābh(d4V6)yanumodate ||

28 = MPS12.7: 施者人愛念。多衆所隨從。名稱日增高。遠近皆悉聞。處衆常和雅。離慳無所畏。

dadat priyo bhavati bhajanti taṃ janāḥ, kīrtiṃ samāpnoti yaśaś ca vardhate ||

ama(d)gu(bhū)taḥ pariśadaṃ vigāhate, viśārado(d4V7)bhavati naro hy amatsarī | 1

29 = MPS 12.8: 是故智慧施。斷慳永無餘。上生忉利天。長夜受快樂。

tasmād dhi dānāni dadati paṇḍitā, vinīya mātṣaryam alam sukhaiṣiṇaḥ ||

te dīrgharātram tridaśe pratiṣṭhitā, devānām svabhāvaga(d4V8)tā ramanti⁽⁴²⁾ hi | 2

30 = MPS 12.9: 盡壽常修德。娛樂難陀園。百種諸天樂。五欲悅其心。彼於此人間。聞佛所說法。爲善逝弟子。樂彼受化生。

kṛtāyuṣāḥ kṛtakuśalā itaś cyutāḥ, svayamprabhā anuvicaranti nandane ||
(te)tatra kṛṇṇanti ramanti cobhayaṃ, samarpitāḥ kāmaga(d4V9)⁽⁴³⁾ṇais tu pañcabhiḥ ||
śrutveha vākyam asitasya tāyinaḥ, svarge ramante sugatasya śrāvakāḥ | 3

31 = MPS12.10: 爾時世尊爲菴羅女。種種說法。示教照喜。示教照喜已。從座起而去
atha bhagavān āmrapālī(m) dhārmīyā kathayā sandarśayitvā samādāpa(d4R1)yitvā samutte-
jayitvā saṃpraharṣayitvotthāyāsanāt prakrāntaḥ ||

(623) 3: 爾時世尊告諸比丘。

Śrāvakabhūmi IV (= Sh.417, 12-19)⁽⁴⁴⁾: tatra bhagavān bhikṣūn āma⁽⁴⁵⁾(d4R2)ntrayatesma.
idaṃ cālambanaṃ saṃdhāyoktaṃ bhagavatā.

6: 若世間美色。世間美色者。又能種種歌舞伎樂。復極令多衆聚集看不。

(ŚBh) sā khalu janapadakalyāṇī (d4R3)paramapradhānā nṛtagītavādita iti mahājanakāyaḥ
saṃnipateta.

12: 云何比丘。彼持油鉢士夫。能不念油鉢。不念殺人者。觀彼伎女及大衆不。

(ŚBh) kiṃ man(d4R4)yadhve bhikṣavaḥ. api tu sa puruṣaḥ amanasikṛtvā tailapātram
amanasikṛtvā utkṣiptāsikaṃ vadhakapuruṣaṃ janapadakalyāṇī(m) manasikuryān mahāsamā-
jāṃ vā.

§ 3-1-表 SHT (IV) 162の『雜阿含』対応表

SHT (IV) 162の断片群 (a~e) は「道品」に集中していると言ってよい。

a: 不壞淨相应; b: 散失卷; c7(+ e): 第25卷 (散失) と力相应・覺支相应; d: 念处相应

従って、未比定の零細断片「c2, c3, c10, d6, d7」も c 群、d 群の集まる所に比定される可能性が高い。

相应名・本来の卷 (現行卷) [撰事分 (VS) の科判]

大正蔵番号; ウパーイカー (Hj); 対応パーリ	SHT (IV) 162	Chung [2008]
---------------------------	--------------	--------------

(散逸22巻) (VS 0)		
cf. 23(31)・882; 5・110	bV2-4	
cf. 23(31)・882; cf. 5・110	bR3-6	
cf. 23(31)・882; cf. 5・110; 24・638	bR6-9	
念處・24 (VS 4.2~4)		
620~621; SN 47.7; 4	d8.	V-021~022
622; SN 47.2	d9, cf. SHT (XI) 4763	V-023
622; SN 47.2	d5	
622~623	d4	
(散逸25巻) 正斷・25 (VS 4.5)、如意足・25 (VS 4.5)、根・25 (VS 4.6)		
cf. 23(31)・878	e + c7 B = V	
cf. 23(31)	e + c7 A = R	
力・26 (VS 4.7)		
668-670	c1	
701-703	c4	
覺支・26 (VS 4.8)		
704-705	c4	
705-708	c5 + 9	
不壊淨・30 (VS 4.12)		
cf. 851; SN 55.9	cf. aV2-4	V-136
cf. 852	cf. aV2-4	V-137
854; SN 55.10	aV1-R5	V-138
854a Uddāna	aR5	V-138
855; SN 55.40	aR5-9	V-139

§3-2. SHT (IV) 30

SHT (IV) 30については本稿に関わる箇所が見られないが^{§(46)}、Chung [2008] 未比定の箇所は以下の通りである。

SHT (IV) 30	大正蔵番号	巻(現行)
h3	42	4 (2)
m	109	5
h4	111 ⁽⁴⁷⁾	6
h2	133-139	6
n5	981	35
n7	982	35

なお、断片「i 1+2」は『發智論』卷14 (『婆沙論』卷140) / 『八犍度論』卷20、断片「k」は『發智論』卷9 (『婆沙論』卷109) / 『八犍度論』卷13の一部で、対応は『八犍度論』に近い。

§3-3-表「正断・如意足・根」各相応と撰事分・ウパーイカー・関連経論・サンスクリット資料

	撰事分 (VS)	ウパーイカー (Hj 番号) と AKBh; AK-vy	Pāli 対応経	声聞地 (ŚrBh) と瑜伽行派文献	関連経論・サンスクリット断片と 経 (名) の言及 TT VIII A
正断相応					
	VS 5.1 (spro 勇)	ø	AN 4.13G; SN 49	II 200	『法蘊足論』正勝品第七 (偈) TT VIII A 11.5-7
如意足相応					
①	VS 5.2 (stobs 力) 1. = (2) ⁽⁴⁸⁾ 復次。應 知建立四種神足。如 聲聞地。已廣分別。	Hj 6075(1)-(4) (1-2) AKBh 384; AK-vy 602[(1) 654]	SN 51, 19	II 212 (2) II 176; 220	『法蘊足論』神足品第八 (1) SBV II 246, 15-23 (2) Saṅg 3.50; Dbh 24 (3) AVS § 15
	2-4. 若略說者由四 種力。			II 212-216; ASBh § 92 p.87.	
②	VS 5.3 (bsgom 修) 1-2. 復次由五因緣。 當知神足略修習相 3. = (5) 謂前後想。 此想分別。如聲聞地。 應知其相 4. = (6) 謂上下想。 此亦如前。應知其相 5. = (7) 謂光明想 6. = (1) 欲等與餘。 懈怠相應。說名懈怠 俱行	Hj 7002(1)-(7) cf. Hj 7011. (3) AKBh 397;	SN 51, 20	ASBh § 92 p.88. (5, 7) II 172 (6) II 172; II 58	cf. Hj. 7011: "rdzu 'phrul gyi rkang pa gnyis pa bsgom pa'i mdo" 「修神足 經 (*Ṛddhipādabhāvanā)」 ASBh § 92: "yathākramam adhi- kṛtyoktaṃ bhagavatā" (7) SamBh 4. 1. 2. 6. 2 "yathāsū- tram"; Cf. AVS § 12 cf. TT VIII A 11.7-9
③	VS 5.4 (ting 'dzin 等持) 1.復次。於五解脫處。 如其所應。當知欲等 增上四種三摩地…欲 增上三摩地 2.精進增上三摩地 3.心增上三摩地 4.觀增上三摩地	Hj 1030(1)-(5) AK-vy 54	五解脫處 AN 5.26; 四種三摩地 SN 51.13 cf. DN 33;	II 212f. AK-vy 52-53. ASBh § 92, p. 87.	Saṅg 5.19; Dasottara. 5.9; 『中阿含』86 說處經; 『大集法門經』卷2; 『集異門足論』卷13-卷14 五法品6; 『成實論』卷14 後五定具品 184.
④	VS 5.5 (rnam grangs 異門) 1. 復有差別。謂由 四門。起三摩地 2. 所餘分別義。及 分別(八)斷行。如聲 聞地應知其相	Hj ø AK-vy 601-	ø	2. II 218f. ASBh 87; 92. MVBhṬ 52	AK-vy 601 "sarvaṃ prahāṇa- saṃskārāḥ punar atrāṣṭau sūtre paṭhyante." Bhk 184: ata evoktaṃ sūtre. "[aṣṭa] prahāṇa[samskāra] samanvagataḥ, ṛddhipādaṃ bhāvayati" iti.
⑤	VS 5.6 (rdzu 'phrul	Hj 2015	SN 51, 10	KVU 106-107	『大毘婆沙論』卷141 「何等名壽…

	神足) 隨所願樂。延諸壽行。或住一劫。或一劫餘	AKBh 44; cf. Hj 6075; 7002		“yathoktam ṛddhipāda- nipāte”	如契經說。若有苾芻苾芻尼等。於四神足若習若修若多修習。彼若希求住壽一劫或一劫餘。隨意自在。由此故說神足為壽」(T27, 725c29-726a7)
根相應 1 (散逸部分)					
①	VS 6.1 安立 (rnam par bzhag) 當知建立二十二根	Hj 1050	SN 48. 0		(AK I.47) (→ AKBh 37.7-) = (AK-vy 90) dvāviṃśatīndriyāṇy uktāni iti. AK-vy. 90.25-91.4. 『法蘊足論』卷10, 498b. 『婆沙論』卷2, 『婆沙論』卷142 「謂有梵志名曰生聞。」
②	VS 6.2 所行境 (spyod yul gyi yul) 六根門。行六境界。	Hj 9005 根相應 Otalāyana	SN 48.42		『藥事』卷10(T 24, 43c20-44a13) atha bhagavān otalām anuprāp- taḥ. 32. cf. (AK-vy 15) uktaṃ hi bhagavatā. ... atisarasi mahābrāh- maṇa,
③	VS 6. 0 無倒經 憂根, 苦根, 喜根, 樂根, 捨根	Hj 3109 「根相應 2」 Hj [8023]	SN 48.40 五根		AKBh 440, 17: Aviparītakasūtre ṛṭṭiyaṃ dhyānam uktvā. SamBh (2. 4. 4. 1. 2): yathoktaṃ bhagavatā-Aviparītakasūtre: 如薄伽梵無倒經中說如是言 (T 30, 331a23)
④	VS 6. 0 樂根, 苦根, 喜根, 憂根, 捨根	Hj 6015「根 相應 2-4」 Hj [5027B]	SN 48.37 五根		AKBh 332.2-3 = AK-vy 520
⑤	VS 6. 0 樂根, 苦根, 喜根, 憂根, 捨根	Hj 2008「根 相應 2-末」 Hj 8018	SN 48.36 五根		AKBh 439, 2; AK-vy 103
根相應 2 (現存部分: 雜阿含第26卷; 經番号と Chung [2008] による整理番号)					
	642 (26.1) Chung [V-29]	Hj 2009	It 62=53; SN 48.23	Chung E] (triṇidriyāṇi) ŚrBh II 134.16;	Chung E] (triṇidriyāṇi) SHT (IV) 623 fol.30 recto 2-1; (V) 1115 verso 2
	643 (26.2) Chung [V-30]	Hj 6074	SN 48.1	Chung E] (pañcendriyā- ṇi) ŚrBh II 176.13;	Chung E] (pañcendriyāṇi) SHT (V) 1427 (Dharmasaṃgraha) recto 4- verso 1;
	644 (26.3) Chung [V-31]		SN 48.2f.	Chung E] (pañcendriyāṇi) ŚrBh II 176.13;	AK-bh (Pā) [422]; AK-vy 554.5-7: Chung E] (pañcendriyāṇi) SHT (V) 1427 (Dharmasaṃgraha) recto 4-verso 1;
	645 (26.4)		SN 48.4-5		
	646 (26.5) Chung [V-32]		SN 48.8	Chung E] (pañcendriyāṇi) ŚrBh II 176.13;	Chung E] (pañcendriyāṇi) SHT (V) 1427 Dharmasaṃgraha recto 4- verso 1
	647 (26.6)		SN 48.9	Chung E]	AK-bh (Pā) [413]

	Chung [V-33]			(pañcendriyāṇi) ŚrBh II 176.13;	Chung E] (pañcendriyāṇi) SHT (V) 1427 Dharmasaṃgraha recto 4- verso 1
	648 (26.7) Chung [V-34]		SN 48.12		AK-bh (Pā) [422]; AK-vy 554. 5- 7
	649 (26.8)		SN 48.20		
	650 (26.9) Chung [V-35]	Hj 2012	SN 48.6f.		1) SHT (V) 1127A (= recto) -B
	651 (26.10) Chung [V-36]	Hj 2012	SN 48.6f.		1) SHT (V) 1127B (= verso) 3-6 AK-bh (Pā) [49]
	652 (26.11) Chung [V-37] VS 6.4 安住外異生 品等 (phyi rol so so'i skye bo yi phyogs la gnas pa)	Hj 2010A	SN 48.14		1) SHT (V) 1127B (= verso) 6 TT VIII A 11.9-10
	653 (26.12) Chung [V-38] VS 6.4	Hj 2010B	SN 48.15-16		
	654~659 (26.13~18) Chung [V-39] VS 6.3 慧根最為勝 (shes rab dbang po gtso)		SN 48.52		Chung E] (pañcendriyāṇi)
	660 (26.193) Chung [V-40]	Hj 2073	ø		AK-bh (Pā) [123] (pañcendriyā- ṇi)

参考文献・略号

向井亮「瑜伽師地論」の撰事分と『雜阿含經』：『論』所説の〈相応アーガマ〉の大綱から『雜阿含經』の組織復原案まで 附『論』撰事分—『經』対応関係一覧表、『北海道大学文学部紀要』33 (2)、pp.1-41. 【向井 [1885]】

本庄良文『俱舍論註ウパーイカーの研究 訳註篇』上・下、法蔵館、2014. 【= Hj】

———, 「シマタデーヴァの伝える中・相応阿含」『佛教研究』第15号, pp.63-80, 1987. 【= 本庄 (S 3)】

細田典明「『雜阿含經』道品のサンスクリット断片— Kat.-Nr.162 について—」『印度哲学仏教学』第16号, pp.29-43 (L). 【細田 [2001]】

———, 「『雜阿含經』道品の考察—失われた『雜阿含經』第25卷所収「正断相応」を中心に—」『東方学』第105号, pp.1-15 (L). 【細田 [2003]】

———, 「『雜阿含』道品と『根本説一切有部毘奈耶藥事』」『仏教学』第48号, pp.1-20 (L). 【細田 [2006]】

———, 「『雜阿含』道品念處相応」『インド哲学仏教学論集』第2号, pp.47-169. 【細田 [2016]】

———, 「梵文『雜阿含』道品「偈頌・要句集」(1) — TT VIII A, lines 1-7—」『インド論理学研究』第8号, pp.147-160. 【細田 [2017]】

Chung Jin-il Chung, *A Survey of the Sanskrit fragments Corresponding to the Chinese Saṃyuktāgama* (『雜阿含經相當梵文断片一覧』), 山喜房佛書林, 2008. 【= Chung [2008]】

AS = *Abhidharmasamuccaya*.

ASBh = *Abhidharmasamuccayabhāṣya*.

AKBh = *Abhidharmakośabhāṣyam of Vasubandhu*, ed. P. Pradhan, 2nd ed., Patna: Kashi Prasad Jayaswal Research Institute, 1975.

AK-bh (Pā) = Bhikkhu Pāsādika, *Kanonische Zitate im Abhidharmakośabhāṣya des Vasubandhu*. Göttingen : Vandenhoeck & Ruprecht, 1989. (略号の後、[] 内に整理番号、AKBh の頁・行を表記)

AK-up = *Abhidharmakośopāyikā nāma Ṭikā* (Tibetan tr., P. No. 5595).

AK-vy = *Sphūṭārthā Abhidharmakośavyākhyā by Yaśomitra*, ed. U. Wogihara, Tokyo: 1932-1936.

ARIRIAB = Annual Report of the International Research Institute for Advanced Buddhology at Soka University (創価大学国際仏教学高等研究所年報).

AVS = *Arthavinīścayasūtra*.

Bhk = *Bhāvanākrama*.

CBETA = Chinese Buddhist Electronic Text Association.

Clauson, Sir Gerard, *An Etymological Dictionary of Pre-Thirteenth-Century Turkish*, Oxford at the Clarendon Press, Oxford University Press, 1972.

D. = Derge ed.

Dbh = *Daśabhūmikasūtra*.

Douglas Q. Adams, *A Dictionary of Tocharian B, Revised and Greatly Enlarged*, 2013.

Divy = *Divyāvadāna*, ed. P.L. Vaidya, (Buddhist Sanskrit Texts 20) Mithila: 1959.

EĀ = Ekottarāgama/Ekottarikāgama.

GRETIL = Göttingen Register of Electronic Texts in Indian Languages.

Kudo, Noriyuki, *The Karmavibhaṅgopadeśa: A Transliteration of the Nepalese Manuscript A* (4), ARIRIAB, 15, 2012, pp. 106-107.

KVU = *Karmavibhaṅgopadeśa*.

MSV = *Mūlasarvāstivādinayavastu*, ed. N. Dutt. Gilgit Manuscript, vol. 3. Calcutta, Srinagar: 1942-1950.

Mv = *Mahāvastu* (-*Avadāna*) ed. Émile Senart, 3 vols., Paris: 1882-1897.

MVBhṬ = *Madhyāntavibhāgabhāṣyaṭika*.

NidSa = *Nidānasamṣukta*, ed. C. Tripāṭhī, *Fünfundzwanzig Sūtras des Nidāna-samṣukta*. (Sanskrittexte aus den Turfanfunden, VIII), Berlin: 1962.

P. = Peking ed.

PVP = *Pañcaviṃśatisāhasrikā Prajñāpāramitā*.

Saṅg = *Saṅgītiparyāya*.

SamBh = *Samāhitā Bhūmiḥ* : das Kapitel über die meditative Versenkung im Grundteil der Yogācārabhūmi, herausgegeben von Martin Delhey, (Wiener Studien zur Tibetologie und Buddhismuskunde; Heft 73, 1-2) 2009.

SBV = *Saṅghabhedavastu*, ed. R. Gnoli. *The Gilgit Manuscript of the Saṅghabhedavastu, Being the 17th and Last Section of the Vinaya of the Mūlasarvāstivādin*, (Serie Orientale Roma, 49), Roma: 1977-1978.

Schmidt, Klaus Totila, *Die Gebrauchsweisen des Mediums im Tocharischen*: Doctoral dissertation, Univ. Göttingen. (1974).

SHT = *Sanskriithandschriften aus den Turfanfunden*.

Sh. = *Śrāvakabhūmi of Ācārya Asaṅga*. ed. K. Shukla, Patna: K.P. Jayaswal Research Institute, 1973.

- ŚrBh I, ŚrBh II, ŚrBh III = 声聞地研究会『瑜伽論 声聞地』 I・II・III, 山喜房仏書林, 1998, 2007, 2018.
- SWTF = *Sanskrit-Wörterbuch der buddhistischen Texte aus den Turfan-Funden und der kanonischen Literatur der Sarvāstivāda-Schule*. Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht. Band I: Vokale. 1994; Band II: k / dh. 2003; Band III: n / m. 2008; Band IV: y / h. & Nachträge zu a / tri ; 21. Lieferung (2009) – 28. Lieferung (2016).
- T = Taisho Daizokyo (『大正蔵』; 続けて巻・頁段・(行)を表記).
- Tamai, Tatsushi, Paläographische Untersuchungen zum B-Tocharischen. Inauguraldissertation, der Johann Wolfgang Goethe-Universität zu Frankfurt am Main, 2010. 【Tamai 2010】
- TT VIII = Annemarie von Gabain, Türkische Turfan-Texte VIII, Texte in Brahmischrift, 1954, Akademie-Verlag: Berlin.
- THT = Tocharische Handschriften aus den Turfanfunden
- Tripathi = *Ekottarāgama-Fragmente der Gilgit-Handschrift*, herausgegeben und bearbeitet von Chandrabhal Tripathi (Studien zur Indologie und Iranistik ; Monographie; 2) 1995,
- TochSprR(B) II = Tocharische Sprachreste. Sprache B, Heft 2. Fragmente Nr. 71-633. Edited by Werner Thomas, 1953, Vandenhoeck & Ruprecht: Göttingen. (<https://www.univie.ac.at/tocharian/?m=tht527>)
- Vaidya = P.L. Vaidya ed., Buddhist Sanskrit Texts.
- von Gabain = s.v. TT VIII.
- VS = *Vastusaṃgrahaṇī of the Yogācārabhūmi* (Tibetan tr., P. No. 5540), 『瑜伽師地論』「摂事分」(VS に続けて章節番号を表記).
- Vsm = *Visuddhimagga*. ed. PTS, 3 vols., London: 1922-1931.
- A. Wayman, *Analysis of the Śrāvakaḥūmi Manuscript*, Berkeley: University of California Press, 1961. 【Wayman [1969]】

〔注〕

- (1) 向井亮 [1985]、Chung [2008] 参照。
- (2) 本稿では漢訳『雑阿含経』に対し、乱丁・散逸を修復した本来のものを『雑阿含』と表記する。相応阿含・相応アール・ガマ・〈雑阿含経〉といった表記も考えられるが、阿含は経の集成であり、経論においても『雑阿含』とする場合が多い（他の阿含も同様）。しかし、『雑阿含』と『雑阿含経』を併記した場合、「経」表記されていないという誤解を避けるため、現行『雑阿含』は「漢訳『雑阿含経』」と「漢訳」を付した。
- (3) 経番号の“a”は経末に続く略経等を示す。
- (4) 「梵行、如意、念處、正勤、根、力、覺、道、止、觀、念身、正憶念一一八經、亦如上說」
- (5) 「有梵天自在造作。化如意。為世之父」
- (6) 「禪思得神通力、自在如意」cf. Hj.2020.
- (7) 向井 [1985] p.9.
- (8) ŚrBh II による科文を付す。
- (9) 科判は向井 [1985] に従う。なお、「VS 5.2」は正確には「VS 4.5.2」と記すべきであるが、最初の「4」、すなわち「菩提分法」を表す章番号は省略する。
- (10) 「復次於五解脫處等者如成實論說。」(T42, 861b23)。
- (11) 本庄(S3)において、6075・7002・2015 が神足門 (=如意足相応) に属する経であることを示唆している。
- (12) Noriyuki Kudo, *The Karmavibhaṅgopadeśa: A Transliteration of the Nepalese Manuscript A* (4), ARIRIAB 15, 2012, pp. 106-107.
- (13) cf. 卷70: 如契經說。苾芻當知。何等為壽。謂四神足。世尊為彼略說法要。令不起座得四神足。

- 故於佛前歡喜踊躍。作諸愛語說此伽他。復次彼依獲得慧命根故作如是說。(T27, 365a12-15)
- (14) Chung [2008] は、品名を nipāta、相應名を varga とし、復元表等で各品を nipāta と表記する (pp.23-25)。cf. p.20, n.62; p.119, n.81; p.251, n.28.
- (15) SN 51.31 にも經名を “Moggalāno” とする内容も関連する經が知られる。SN 51.14 は、如意足相應第 2 章 “Pāsādakampana-vaggo” に含まれ、章名 (vagga) はこの第14經に由来する。従って、經名も『鹿母講堂震動』等を想定する方が、より端的に内容を表す。
- (16) 行番号は各葉 8 行×表裏×3 葉=48行を通し行として、表記される。各葉は 2 つの断片からなり、左側の断片中央 (3~6 行) に綴じ穴 (7-8 シラブル程度) があり、その下部 (裏面上部) と右側の断片下部 (裏面上部) が、最大20シラブル程度破損している。
- (17) “calitanāni.” と転写され、脚注 5 で “lies *calitā*?” と修正案を示す。
- (18) 「如意足」同様漢訳『雑阿含經』の訳語を表記。例えば、卷21「欲定斷行成就如意足、精進定、心定、思惟定斷行成就如意足」(T2, p.147b3-4)
- (19) Sir Gerard Clauson, *An Etymological Dictionary of Pre-Thirteenth-Century Turkish*, Oxford at the Clarendon Press, Oxford University Press, 1972, p.933.
- (20) Cf. ŚrBh I 74-75 [C-III-4-b- (2)] katham atilīno bhavati. yathāpihaikatyo 'lajji bhavati mandakaukrtyaḥ, śaithilikaḥ śithilakārī siksāpadeṣu. evam atilīno bhavati.
云何名為大極沈下。謂如有一性無羞恥惡作羸劣。為性慢緩。於諸學處所作慢緩。如是名為大極沈下。(T31, 403c13-15)
- (21) 目連の足指 (pādaṅguṭṭhaka, 如意足の足 [pāda] に掛けている) による「鹿母講堂震動」の「震動」を表す動詞は 3 語で、3 番目に “sampacāleti” が用いられる。“yathā pādaṅguṭṭhakena Migāramātupāsādaṃ saṅkampesi sampakampesi sampacālesi.”, “Tumheva kho bhikkhave saṃvejetukāmena Moggalānena bhikkhunā pādaṅguṭṭhakena Migāramātupāsādo saṅkampito sampakampito sampacālito.” (SN vol.5, p.270)。
- (22) 「正断相應」では一偈が引用され、詩に “ca” も含まれていたが、パーリ「如意足相應」には一偈も見られない。『法蘊足論』も同様。
- (23) TochSprR(B) II, pp.336-337.
- (24) Tripathi, p. 189, n. 3: “*Bodhicaryāvatāraṇajikā* 5. 54 (Vaidya p. 63) und *Śikṣāsamuccaya* (Vaidya p.68): *amattena anunmattena acapalena acañcalena abhrāntena amukhareṇa anunnatena upasthitasmṛtinā samprajanyena* (scil: bhavitavyam).”
- (25) Tripathi, p.189, n.4: “Hier fehlen etwa 10 akṣaras. Nach der Pāli-Parallele (s. Anm.1, AN II.5.1 [I, p.70]) *vibbhantacittā* dürfte man entweder *vibhrāntacittā* oder *āpannacittā* (belegt oben § 25.11 [A10]) oder *vyāpannacittā* ergänzen. Dann wäre in der Lücke noch ein Wort zu erwarten; in Frage käme vielleicht *abhidhyālukī* oder *mithyā-dṛṣṭikā* (belegt ebenfalls § 25.11 [A9, 11]).”
- (26) 続く EĀ 26.43 は “gaṃbhirā parṣat” について、反対の意味の定型句。
- (27) “pakaiś = BHS patatyai (537b1^C) [In form the B(H)S represents a feminine derivative of *patat*- ‘flying, falling, etc.’ — perhaps an otherwise unattested ‘bird’s tail’ ?]” Douglas Q. Adams, *A Dictionary of Tocharian B, Revised and Greatly Enlarged*, 2013, p.371.
- (28) Tamai [2010] p.411: “〈patatyai ▶ pakaiśā〉 537b1 steht m.E. für /patatā ▶ pakṣais/. Beide skt. Wörter müssen Instr. sein. Der Schreiber hatte keine guten Kenntnisse des Skt.-Wortes (〈pakṣantse〉 ist in D536b3 belegt).”
- (29) i.e. “vyāyacchate. vīryam ārabhate. cittam pragrṇhāti. pradadhāti.”
- (30) cf. AK-vy 514:
- (1) katham utpannānām pāpakānām akuśalānām dharmānām prahāṇāya chandam janayati vyāyacchate. vīryam ārabhate cittam pragrṇhāti prapidadhāti.
- (2) anutpannānām anutpādāya chandam janayatīti pūrvavat.

- (3) anutpannānām kuśalānām dharmānām utpādāya chandaṃ janayatīti pūrvavat.
 (4) utpannānām sthitaye asaṃmoṣatāyai chandaṃ janayatīti pūrvavat.
 (31) TochSprR(B) II では、“[t:]tvam”と転記し、p.336, n.7で“(andha)tvam”と復元。
 (32) orkamotsāññe ‘blindness’: orkamotsāññe = BHS andhatvam (537a3).
 (33) TochSprR(B) II p.336, n. 8では、“(anta) r(ṇ) āmayati zu erg.?”と復元案を提示するが、Schmidt, Klaus Totila, *Die Gebrauchsweisen des Mediums im Tocharischen*: Doctoral dissertation, Univ. Göttingen. (1974) による修正案に従う。
 (34) () 内の数字は、細田 [2016] 同様、「摂事分」・『ウパーイカー』、その他のサンスクリット資料との対照の便宜を図るための『雑阿含經』分節番号。本稿では『ウパーイカー』の分節番号に当たり、紙幅の関係で対照表を掲載することは出来ないが、『ウパーイカー』引用経の場所を示す目安として用いた。
 (35) T31, 740b11-12. なお『中邊分別論疏』卷3は、「神足」について「摂事分 (VS 5.2)」を引用し、『顯揚聖教論』卷2「摂事品」(T31, 488c14-)・『阿毘達磨集論』卷5 (T31, 684c10-)・『阿毘達磨雜集論』卷10 (T31, 740a17-) を参照する。この箇所についても、以下の通り『阿毘達磨雜集論』卷10を参照する。
 薄伽梵說。我之欲樂。無有下劣。亦無高舉。於內不聚。於外不散。有後前想及上下想。開發其心。遠離纏縛。與光明俱。自脩其心。當令我心無諸闇蔽。上來說出對法論 [= 『阿毘達磨雜集論』卷10 (740b8-12)]。(續藏 48, No. 797, p.163b3-p164a1)
 (36) T29, 287b15-16.
 (37) T29, 136a21-23. [= 『順正理論』卷73 (T29, 739b17-18)].
 (38) 「声聞地」(ŚrBh I 150-153; ŚrBh II 234-235) では11項目、「摂異門分」では12項目の一つとして解説される (T30, 760b17-c2)。
 (39) d5Va の比定位置は、d5Vb と c の間や他の d 断片に比べて開きすぎている。
 (40) “/// k(r)amaṇi pra[tiṣṭh].” を訂正。
 (41) “/// (upaja)[gā] ma tena ///” 語順が異なる。
 (42) Mps 12.8 “t(e)”
 (43) SHT (IV) 162 d4 B 9: “[l]ā [s].”.
 (44) Wayman [1969] p.122-124: S12A.6-7a; T154a-5; C460c21-.
 (45) SHT (IV) 162 d4 A 2: “(āma)ntrayati sma | [l]”.
 (46) SHT (IV) 30 d V8は、第130經に続く略經群 (“Abridged Sūtras”, Chung [2008], p.70) であるが、「道品」略經群との関係性は重要である。
 (47) 卷17第475經から第478經にも対応するが、他の「h」断片群がその前後に対応することから、卷6第111經に比定する可能性が高い。
 (48) 「1-4.」は VS 5.2 を4文節(筆者による暫定)とし、(1) - (4) は Hj 6075 (cf. SN 51.20) に基づく番号で、各内容は以下の通り。
 (1) ṛddhi, (SN 51.19) *iddhi*, 如意
 (2) ṛddhipāda, (SN 51.19) *iddhipada*, 如意足
 (3) ṛddhipādabhāvanā, (SN 51.19) *iddhipadabhavana*, 修如意足
 (4) (SN 51.19) *iddhipādabhāvanāgamini paṭipadā*, *修如意足道
 以下、表中の「1.」「(1)」の表記も同様に、それぞれ VS の文節と Hj に基づく番号を示す。

(ほそだ のりあき 仏教学科)
 2019年11月18日受理